

---

# 不思議な冒険

大魔人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不思議な冒険

### 【Nコード】

N4173D

### 【作者名】

大魔人

### 【あらすじ】

ある田舎街で育った青年森野ケイタは学校の麓にある森に冒険に出かける。がとんでもない事になる。ふと世界に疑問を感じ始める同級生との恋愛要素も含む小説

## 第一話

ある一人の少年の名を森野ケイタという。その少年は逆冒険が好きで毎日学校の麓にある森に出掛けていた。家の周辺はのどかで自然に満ち溢れており、朝には小鳥の囀ずりが良く木霊していた

ケイタは少年といっても青年に差し掛かる年代で15才程度だという。

ケイタは学校が終わると直ぐに麓にある森に出掛けた。

街は自然が豊かで遊ぶ場所と言っても限られており、友達と雑談をするか公園で遊ぶか程度であつたという。

森はとても緑が深く奥行きは当時想像を出来ぬ程の広さであつたという。

ケイタは興味本意で森に行き来し、ある一定の場所まで行けば今日は引き返し、次の日は最も遠い場所へ、次の日は更に遠くの場所への行き来を繰り返していた。此れがケイタの些細な楽しみでもあつた。何処までも行きたい、とてつもない広い森の果てを探したいと思っていた。これは人間が宇宙の果てを行き来したい心理に似ている。

ケイタは学校で授業を受けていた

今日は何時もの如く授業中であつた。何時もの様に放課後のチャイムが鳴り始める前には僅かながらの高揚が滲み溢れてくる。

キンコーンカーンコーン

このチャイム音は授業の終わりを意味する。授業は朝に4時限まであつて給食を挟んで5時限目まである。5時限目の終了のチャイム

は下校を意味する。今がまさにその時であつた。森に出掛けられる好奇心がケイタに訪れた。心が高揚し始めた。

「それでは今日は此処までね。それでは解散」

教室はザワつき始めた

ケイタは筆記具を鞆に詰め込むと一目散に椅子から腰を上げるとする。

「森野君」

声をかけられた

「はいっ」

「貴方明日は課題ちゃんとやっておくのよ」

「はい。先生分かってます」

管崎ミナ先生だ。スパルタ教育である。隣で盗み聞きをしていたと思われる同級生の坂下アリサが次いでにたしなむ様に口を挟む。

「ケイタは何時も口だけ何だから。ちゃんと宿題してきなさいよ。」

「分かつてるよアリサは横から何時もうるさいな。ちゃんとやるって明日楽しみにしてなよ」

「本当なの」

少し半信半疑な表情をアリサは浮かべた。しかし気にせずケイタは教室から飛び出す。教室を飛び出す手前で

「まあそついう事だから。先生さようなら」



## 第二話（人喰いクロコダイル）

アリサは少し心配そうにケイタの影を見つめた。

（ケイタの馬鹿…）

心に終い込んだ

その頃ケイタは学校を抜け出し疾風の如く廊下を駆け出した。素早く抜ける仕草は獅子奮迅を彷彿とさせた。

（よし今日は調子がいいぞ。

新記録塗り替えられるかも知れないなあ）

ケイタは思った

森は学校の直ぐ麓にあるので時間にして5分程度で辿り着いた。しかし奥に進むに連れ霧が濃くなってくる。見渡す限り木であった。

森は樹が洪く腐敗していたり、腐敗にハエ等が集っている。

しかし何時もの事なので気にせず先へ進む。

走る走る走る

その時だ

勢い余って脚を踏み外す。何かに脚がつまづいた様だ。遠心力で転びそうになるが見事なまでのバランス感覚で着地した。

「あぶね。今の普通じゃ転んでたぜ」

ケイタは何かに気付いた。

「ん…何あれ。」

尻尾である。どうやら其れにつまづいた様だ。しかし良く眼を凝らして見てみた

緑で長くて大きくて鰐のようで…。目の前には人喰いクロコダイルの姿があった。

（げげ。…まずいかも）

クロコダイルは恐る恐る何かに気付いた様に眠りから覚める。眼を開くと右往左往を繰り返す目の前に未確認生物がいると分かると少しずつ近づく

（…まずい）

ケイタは慌てた。人喰いクロコダイルとは出くわした事があるが此れは大物であった  
全長は1・5メートル程度だろうか。額に冷や汗が流れた。脚が震えだす。

少しずつなのだ。ホンの少しずつ恐る恐るとケイタに近付いて来ている。余り悟られぬ様に。

少しの間一人と一匹はにらみ合いが続くしかし緊張の糸を解すかの如くケイタはダッシュを試みた。

（振り切ってやる）

それと同時に人喰いクロコダイルももう突進してきた。

「ガルウウ」

速い人喰いクロコダイルは独自の進化を遂げた身体スピードでケイタに襲いかかる。

（やばいぞ。振り切れるか。かあちゃん俺不味いかも）

汗がひたたり落ちる  
その距離5メートル

ケイタはもうダッシュする。

（明日の課題出来るかな。）

ケイタはダッシュした  
その距離4メートル

（…不味いぞ）

振り切れるか

その時である

上空から声がした

「おい。樹によじ登れ。  
枝に捕まれ」

ケイタは上空にある枝にジャンプした。枝に捕まり樹に登る

「ふう〜あぶねな。ケイ」



目の前にはケイタより一回り大きい腕っぷしの強そうな同級生有田  
テツヤの姿があった。

ケイタは疲れながらも口にした

「…テツヤか。助かったぜ」

## 第三話（テレパシー）（前書き）

t e l e p a t h y

### 第三話（テレパシー）

「気にするな」

テツヤは冷静に問い返した。

ケイタは突如の疲労からか貧血を起こした。気が少し遠くなる気がした。

「おいケイ。しっかりしろ  
寝るなよ」

テツヤの声が遠退く。体が痺れてきた。視界が薄らぎ曖昧模糊している。頭の中で声がする。

（…大…夫か）

…ん

（…大丈夫か）

誰だ

（…意識はある見たいだな。俺は今お前の頭の中にテレパシーを送っている）

…なんの事

（何れお前には気付く時がくるはずだ。テレパシーの時間は極僅かしか無いんだ。いいかよく聴けよ。）

…何

（この森、いやこの世界に今とてつもない天変地異が起きているんだ。今日会った人喰いクロコダイルがいい例だ。単刀直入に言うぞ。此のままでは世界は崩壊する。）

えっ。本当に

（だからお前が救うのだ）

…救う？

（そう…悪い。時間がきた。また後日会おう。）

詳しい事は次の機会だ。お前には世界を救う力が備わっていると信じている…）

目の前にはテツヤがいた。ケイタはふと我に帰った。記憶が少し飛んでいた様だった。しかしあまり気にしなかった

「助かったぜ。サンキューなテツヤ」

「ああ気にするな。そんな事より大丈夫か」

ケイタはたった今テレパシーという不可解な現象を体験したが、こ

の時はあまり深く考えなかった。

「大丈夫だ。今の所なんとか平気」

人喰いクロコダイルは深い森に姿を隠した様だ

ケイタとテツヤは人喰いクロコダイルについて考えた。ケイタは語りかける

「あんな凶悪怪物この地域で見たことないぞ」

「ああ俺もだ。あの怪物はある一定の地域でしか現れないはずなんだが。」

少し日が暮れ初めていた。

鴉が鳴き始めた

蝙蝠が飛び交った

ケイタはある事に気付いた。時間が無いのだ。日が暮れてしまう。こんな処で時間を費やしている場合ではないのだ。目的を忘れていた。森を駆けるのだった。しかしまだ昨日の地点にまで到達していない。しかしどうしようか悩んだ。

今日の森は少し危険。

今までに類を見ない怪物と遭遇したのだから。此のまま進めば生きて帰れる保証はないが責めて昨日の道標までは向かいたいと思っていた。

「テツヤお前帰るか？」

「は。いや俺は帰らねえ」

「じゃこの森一緒に駆けようぜ。昨日の地点までだけどな。用意出  
でてるか？」

「面白そうだな。付き合っぜ」

「俺についてこいよ」

「任せろ」

彼等は森を駆け出した  
森を徐々に深い霧で覆い尽くされている

第四話（迅速に駆ける）（前書き）

怖

#### 第四話（迅速に駆ける）

ケイタはアリサの事に考えを寄せた

（アリサ今何してるんだろうか）

まあ明日、課題研究について話すか。

そんな事よりもこの森を迅速に抜けねばならないのだ。人喰いクロコダイルに出会したら

また厄介な事になる。昨日の地点までなんとか辿り着かねばならないとケイタは考えた。テツヤもケイタの後を追って走る。

忍び足であった。何時もなら迅速であるが、闇からの魔の手が忍び寄る可能性を示唆した。

日は刻々と沈んでいた

森は闇に包まれてつつあった

森は複雑多岐に渡って道を記していた。しかしケイタは昨日までの距離を目指した。

森は深く様々な生態が存在していた。しかし夜が近づくと怪物が凶暴化するのは何時の時代も共通であった。そんな心配を考えてかケイタ達は少し速度を速めた。

「少し日が暮れそうだ。速度を速めよう」



「面白いな。乗るか」

スピードを上げると、足音は飛躍的上昇する。そしてそれらは深い森に響き渡る。静かな森に鼓動を伝える。

怪物の聴覚を馬鹿にしてはいけない。僅かな大地の揺れに気付く。その方向を予想すると方向転換をした瞳孔が輝く。

薄暗い茂みの中その怪物は刻々と足音の後を辿る。

その頃

ケイタ達は道標まで直ぐの処にいた。目的地までもう目の前であった。

その安心から脚が縛れる

次の瞬間足をつまずく。体が宙に浮くや否や見事なまでに転けてしまった

「痛つてええ」

ケイタは転けてしまった。

脚の擦り傷から新鮮な血液がひたたり流れる。痛みに耐えている様であった。

「大丈夫かよ」

しかしケイタはすぐに起き上がる。安心立命感を漂よわせた

「大丈夫だぜ。こんなの何時もの事だ。自然に治るよ。それよりも

着いたぜ。其れが目印の樹だ」

テツヤは目の前の樹を見た  
頗る大きなポプラの樹がある。

「なる程。ここがその場所か」

「そうだ。少し休もうぜ。疲れたし」

彼等は休息をとる事にした

…血

…血の匂いがする

その怪物は嗅覚に意識を傾けた。僅かな薫りからは哺乳類を喰った  
記憶を辿り寄せた。

その怪物はただひたすら振動の後を辿った

第五話（アリサとの記憶）（前書き）

m e m o r y 恋愛系です

## 第五話（アリサとの記憶）

ポプラの樹の根元で彼等は休息を取る

テツヤはケイタに語りかけた

「そういえばお前坂下とはどういう関係なの」

坂下とは坂下アリサの事である

「馬鹿言ってんじゃないぜ。聴きたいか。聴きたいのか？」

「ああ。少しな」

「何故だ」

「特に意味は無いけど…」

「お前意味分かんないな。でも今の所は友達見たいなもんかな。うん」

「…そうか」

テツヤ顔から軽い笑みを溢れた気がした。

ケイタは答えた

「何笑ってんだよ」

「いやいや。気にするな。でお前好きなのか坂下の事？」

「アリサとは幼い頃からの付き合いだ。その気持ちは何時でも伝える事は出来るぜ」

「面白い奴だ」

「お前がまさかそんな事考える奴だったとは。不覚だぜ」

ケイタは昔の事を思い出しつつあった。学校で居残りをしていた時の事だ。

その日ケイタは学校の課題学習を忘れていた為放課後一人居残り学習をしていたんだ。教師もいた。

「森野君サボらないように。少し用事出来たから」

そういうと担任は出ていったんだ。教室に一人残された。

「ちくしょー菅崎ミーナ先生」

黙々と時間だけが過ぎていったんだ。足音がしたんだ。結構急ぎ気味で。誰か教室にやって来る。教室の扉が開かれた。それがアリサだったんだな。空気少しだけ重くなったんだな。「何してるの」

「居残り学習さ」

「分かるの？」

「多分。分かる。すぐおわる」

「一緒に帰ろ」

「いいよ。これ終わったらな」

「どれどれ。」

そういうとアリサは俺の横まで来ると一緒に課題を手伝ってくれたんだ。少し距離が近い。この時ばかりは冷静を欠いたよ。それを察知してかアリサが

「変な事考えてない」

「馬鹿言つなよ。そんな事考えて…ない」

少し笑うとアリサは課題を進めていった。俺の頭では疑心暗鬼のパントマイムが行われた。

数十分間後だったか

「出来たぁー」

「…よし。サンキュー。」

「じゃあ一緒に帰ろうね」

結局この後担任帰ってくるまで待ったが帰って来なかった。薄暗く  
なってから一緒に帰ったんだ。だから少しあの時は緊張したんだ。

「ルンルン。」

「…」

実はこの時の記憶あまりないんだ。気が付いたら別れる間際だったんだ。アリサは切り出した

「また一緒に帰ろうね」

「…ありがとう。また明日な」

「また明日ね」

俺はアリサを見送ったんだ。そういつと俺達は家路に帰った。少し風が寒かった日の出来事

ポプラの樹には僅かな光が反射して緑の光沢が散りばめられている。

## 第六話（アリサとの記憶2）（前書き）

m e m o r y 2    恋愛系です。人により飛ばしても可。



## 第六話（アリサとの記憶2）

ポプラの樹を見つめながらケイタは考えた。そしてアリサとの学校の帰り道を徐々に思い出しつつあった

そうだった。少しずつ思い出してきた。学校の帰り道の記憶を。あの頃のアリサ少し髪の毛が長かったんだ。セミロング位だったかな。だから風に髪が靡いてたんだ。その風に乗って仄かなリンスの薫りが充満していた。

道中は暗く険しかった。だからアリサは僕の腕に絡みついて来たんだ。何かに怯えている様で学校で見たアリサとはまた違うアリサを見た気がした。何か人が変わった様な気がして凄く面白かった。

「…怖い」

「何時もの帰り道だよ」

確かにその当時は凶悪事件が相次ぎ、避難警告が出されていた。怖い気持ちは僕も一緒だったんだ。だからその時はより一層二人の親密度は増した。

本当の事言つとアリサより、僕の方が怯えていたんだ。いざとなると一人だけ逃げたしたい気持ちで一杯だったんだ。でも横をチラリと見た。僕以上に怯えてる彼女見て何故かそんな気持ち無くなってしまったんだよね。今思うとあれは演技だったのか

なるべく前方にだけ注意を引き付けていたんだ。辺りは暗かったけど慣れれば十分に辺りを見渡せる程度だったから。

ふと横の叢から何か出て来たんだ。死角だったかな。

「キャ」

何だったんだろ。良く見えなかったんだ。小動物か何かか…。

「どうしたんだ」

「なんか出てきたよ。可愛い」

するとだ、兎かな。白くて可愛いらしいんだ。でも良く目を凝らして見てみると怪我してるんだ。表情は変わらないが苦しそうなそんな印象を受けた

「可哀想」

アリサは兎を抱えようとした

「よせ。そつとして置くんのだ」

俺は自然の摂理に手を加えるのは良くないと思った。だからそのまま道中を進む事にした。凄く残酷なようだがその時はそう思ったんだ。もう仕方なく先を進む事にしたんだ。

黙々と進んでいる内に蛍光灯の光がポツリポツリと見え始めた。その直ぐ目の前にベンチがあった。公園で見掛ける様なベンチを。

第七話（奴が遣ってきた）（前書き）

w a n i c o m e r u n n i n g  
奴が来た

## 第七話（奴が遣ってきた）

空想中に突如テツヤから呼び出される。

「おいケイ」

「…ん」

「おい。そろそろ帰ろう」

「…ああ、そうだな。痛っ」

「どうした」

「どうやら脚が痛いらしい。さっき転けた箇所が悪化しているようだ。捻挫か骨折かどちらかは分からない。しかし―大事には至っていないようだ。」

「ああ帰ろう。帰ったら治療するか」  
「彼等は帰る支度を始めた。」

「奴だ…」

「奴がやって来たんだ」

刻々と歩みを寄せながら。

少しずつ歩みを寄せながら。

吐息は消して荒くなかった。ただ微かな産声を複式呼吸で。隙を伺いながら。血を求めながら。緑色の煉瓦を身に纏い、木漏れ日の光に紛れながら樹木の紆余曲折を経て、尚且つ直線的に進むのではなく蛇の様にうねりを上げながら…。膨大なる緑と一心同体を余儀無くされ、帰って其れが好都合であるかの様に…。

意思を持つのかそのワニは。機を待っているのか。

何故ケイタは脚に怪我を負ってしまったのだろう。そんな脚で大丈夫なのか。そんな脚で樹に登れるのだろうか。そんな脚で逃げ切れるのだろうか。そんな脚で全力疾走する事が出来るのか。

それは分からない彼等に聞かなければ分からない。分かるはずがない。

もし仮に石を投げたとする。しかしワニはそれらには反応を示さないだろう。何故なら瞳に映る彼等をキャッチしてしまってるから。標的は定まっているのだ。しかし直ぐには行かない。狂暴なあの性格なのに何故だ。答えは簡単。何故なら逃げられる。ついさっき覚えてしまっている。二度目は通用しない。確実に見据えると伺える。

世界は天変地異が起こっている。普段ある一定の地域でしか見ないこのワニ。平穏な森に姿を現した。どうやって現れたか。ワニは自らの意思でやってきた。酷く荒んだ地域から緑が豊かなこの森へ

住み着いた。

だから世界は危機に迫っている。森羅万象が崩れさるうとしていた。  
何れこの様な怪物はゴマンと現れるだろう。

どうなるんだ…

第八話（噛み付く）（前書き）

奴が I  
w a z  
b i t t e n  
b y  
a  
w a n i

## 第八話（噛み付く）

どうなるか。彼等はどうなるのか。

その時テツヤはある雑音に直ぐ様聴覚を聞き寄せた。後ろを振り返るや否や、顔が青ざめるとワニの存在に気付く。

真つ赤に開く口が目の前に広がる。唾液が口内からひたたり落ちる。すると瞬時に素早く閉じられた。

「痛えええ」

ケイタの肩にワニの鋭く尖った歯が突き刺さる。ワニは無理矢理肉を喰い千切ろうとするが骨が邪魔をしてなかなかそれが出来ない。

歯が滑った

歯が滑って一部の皮膚が引き裂さかれた。その為ワニはケイタの肉を喰い千切る事が出来ずにいた。間を置いてから距離が離れた。テツヤは素早く逃げる。次いでに言い放つ。

「逃げるケイ。」

「ぐあ」

傷は浅かった。よたよたとさせながらも身体を動かせる程度の余力はまだ残っていた。素早くその場から離れる。しかし追い撃ちをかけるかの如くワニは身体をウネウネとさせながら移動しケイタの後を追う。大きな口が開くと背後から噛み付くと試みる。しかし逃げ



るケイタ。スピードを上げて走る。

「糞野郎目えええ。来るな」

スピードを上げる。逃げ惑うケイタ。焦る。ひたすら焦る。草原を駆ける。しかし次の瞬間あり得ない事態に気付く。

脚が動かない

さつき転んで傷付いた片足が鋭い痛みを増している。血は止血している。ただ脚が痛い。もう走る事は出来ない。もう脚を止めるしかない。

（駄目駄目。）

最後の余力を振り絞って走る。しかし不可能である事に気付く。ウネウネとうねりをあげながら追い掛けるワニ。

（駄目だつて俺）

人間の再起不能の瞬間を垣間見るかもしれない。自分と言う人体実験を用意て

（駄目か）

歩みを止めた。背中 of 擦り傷が痛い。今日は汗を掻いた。温まった湯船にゆっくりと浸かりたいと目を閉じた。

次の瞬間

枝であった。腕サイズ程度の。鋭いスピードを保ったままのその枝

が“ワニ”の頭部を正確には目玉付近に直撃した。テツヤの姿がそこにはあった。

「休むなよケイ」

「…テツヤか。」

「肩貸せ」

しかしその行為はワニをより冷静にさせた。

第九話（雄叫び）（前書き）

a  
war  
cry

まず  
い

## 第九話（雄叫び）

枝で皮膚が腫れ上がったワニ。軽く傷を負ってしまったのだ。ワニはその場に立ち尽くした。見知らぬ生物二人を前にしてある行動を取った。

「ガルウウ」

ワニは雄叫びをあげ始めたのだ。同じ種にしか分からぬ一種の信号である。一人では危険だと感じた。森にはその他の人喰いワニが潜んでいた。その信号をキャッチすると一斉に信号を送るワニの場所へ急いだ。ワニは懸命に雄叫びをあげ続けた。

一方彼等二人はテツヤの肩を借り足早に森を抜け出そうとしていた。しかし森を抜けるにはまだまだ距離がありそうだった。だがワニとの距離は相当離れた。ケイタは考えた。

「奴と闘うんだ」

「まてまて逃げるのが先決だ」

「でも…」

「奴との距離を離さん事には何ともならん。」

ケイタはテツヤの言う事に従った。満身創痍していることは事実であった。ワニとは後方に見えない位までの距離を保った。彼等は出来るだけ静かに森を抜ける。

「ゆっくりと進めば大丈夫だ。位置は絶対に分らん」

霧は微かに揺らぐ。夕日の光は極僅かな樹木の角度から赤茶色に照らしている。

ワニというワニは主犯格のワニの元に集まり初めていた。全てのワニの数を数えると8体ものワニが集まった。ワニ同士にしか分からない独自の周波数で発せられる言語での会話を始めていた。

「ガルウ」

「ガルウウ」

「ガリウウ」

目の前に兔が通りや否や見事な速度で反応し貪る様喰い出した。それらの食事が終わるとワニは一斉に奴等二人を探し回った。

「ガルウウウ」

「ガルウ」

森を一斉にウネウネと駆け抜けた。

少しケイタは頭痛がしていた。例のあの現象が起ころうとしていた。視界が曖昧模糊してくる。頭の中で声がする。

（速く…めろ）

まただ

（速く目覚めろ。不味い事になってるぞ。）

何

（ワニはどうした？  
大丈夫いない

（うるたえるなよ。ワニを甘く見すぎだ。特に人喰いワニは臭覚が鋭いんだ。）

だから

（背中を血を元に追跡してくる。悪い…時間だ。テレパシーは余り使いたくないんだ。精神力が大幅に減少されるんだ…）

記憶が戻る

「おい。ケイ何してんだ」

「不味い事になったぞ。テツヤ」

第十話（血の付着したシャツ）（前書き）

bloodstained shirt  
なんと

## 第十話（血の付着したシャツ）

テレパシーの上限は一日二回迄と決まっていた。というより彼自身の中でのルールとして定めていた。二回以上のテレパシーは死と直結する。よってこれ以上彼からの音震源は絶たれる事になる。彼の千里眼によるテレパシーは今日の日は禁じられた。

「時間か。しょうがない。」

遥か彼方で呟く。

百鬼夜行が行なわれるか、又は双方が火花を散らすのかは終始一点、それは神のみぞ知る。

ワニは広い森の中駆け始めている。血を辿る。匂いを辿る。臭覚に意識を傾けた。僅かだが確かにする。空气中にその薫りが仄かに糸を引いてる。全てのワニ、八体は其々のルートを通ってケイタ達の後を追いつ始めた。

これは先頭をきっているワニである。素早く移動。停まる。素早く移動、停まるを繰り返しケイタの後を辿った。距離をドンドン詰めて行った。

しかし次第に匂いを辿るとそれは徐々に薄くなっている事に気付く。ワニは足早に進行を進めた。辺りはまだ夕日が差し掛かっている。

しかしおかしい状況に気付いた。匂いが跡絶えた。



目の前に広がるのは

湖である。此処で匂いが跡絶えたという事は奴等は此処から帰還ルートとして利用したのは間違いなかった。

そうなのだ。水中に入れば匂いは途絶える。それを利用したようだがしかし森の湖の半径はたかが知れている。ワニは湖の半径をグルグルと周り始めた。すると

或る

匂いの続きがあつた。やはりあつた。奴等は一度湖に入り水中を進むと別の地点から上がる。それから森の脱出を図つたのだ。

しかし

血の箇所がもう一つ増えている

何故か右と左から漂う。血の匂いが。おかしいのは間違いなかった。遠い箇所と近い箇所だ。ワニは少し困惑した。どちらを追うか迷つた。紆余曲折の上近い箇所を選ぶと凄まじい勢いで駆け出した。何かあるが考える間も無かつた。時ワニからしても想定外であつた。彼等を見失う事は想定外であつた。だがとにかく彼等を追わなければならんと考えた。

距離にして直ぐだつた。

時間にしてもすぐであつた。しかし其処にあつた物は実に奇想天外な物であつた。

“ 血の付着したシャツ ”

が落ちていた。ただそれだけであった。ワニは状況が呑み込め無かった。

## 第十一話（テシヤの戦略）（前書き）

plan a strategy  
なるほど

## 第十一話（テツヤの戦略）

無論それは彼等が考えたフェイクであった。ワニを落とし入れる為の。

負傷しているケイタを考えると当然の選択であった。このままでは不味い。が彼等の考えであった。餌食になるのではないか。そこで考えた。湖に入って消息を絶とうと。この時湖の水深は然程なかった。何故なら脚を負傷したケイタは泳ぐ事すらままならなかった筈であるから。湖に入るケイタ。

「うげえゝ渗みる」

そうだ。ケイタは負傷した傷に水が滲みた。だが耐えたのだ。湖から陸に上がる彼等。

だがこれで大丈夫だろうか

確かに不十分であった。湖は然程広くなかったのだ。周りを丹念に調べあげれば何れ気付くだろう。

するとテツヤはケイタに要求したのだ。

「シャツを脱げケイ」

「ええ？何でだよ」

「いいから。俺に考えがあるんだ。」

ケイタはシャツを脱ぎ始めた。

「何するんだ」

「二に別れるぞ。」

するとはテツヤはケイタの血の染み付いたシャツを片手に作戦を考えた。此れが臭覚の鋭いワニに対しての盲点となった訳だ。テツヤは続けた

「出来るだけ正規のルートで帰ってくれ。」

「ああ。いいけど。テツヤはどうするんだ。」

「俺は出来るだけケイと離れ奴を誘き寄せる。このシャツでな」

シャツをチラリと見せる。無論ワニをテツヤのシャツへ誘き寄せる事が出来る確率は100%では無かった。しかし

一刻の猶予も許されぬ緊迫した状況での此の現象がワニの思考を鈍らせた。

（とにかく奴等を追わねばならん）

がワニの思考であつた。この状況下が最も近いであろう血の染み付いたシャツを持ったテツヤの元へと誘導した。

追ってくるであろうワニに対してテツヤはあまり遠すぎない場所でシャツを目立つ場所へと手離す。それらの作業が終わると身を隠す。するとそのままケイタの後を追う。

其処に遣ってきたワニはシャツがトラップだと気付くが時はもう遅

かった。

かけ離れていた。もう一人の人間を追うには時間が足りなかった

単独行動を好む人食いワニは此れ以上どうしようもなかった。

その他七匹のワニは湖の中を永遠と探し求めた。何れ飽きて個々の持ち場に去った

この作戦を成功させた

。テツヤは類い稀にみる天賦の才のお陰でこの極地を切り抜けたのだ。

第十二話（最終話）（前書き）

t  
h  
e  
  
f  
i  
n  
a  
l  
e

## 第十二話（最終話）

彼等二人は足早に森を抜け出した。辺りはすっかり闇に包まれてい  
る。上着はテツヤに借りた。テツヤはケイタに問い掛けた。

テツヤ

「ふゆゝ危なかったなケイ」

ケイタ

「ああ。こんな不思議な冒険は始めてだ。夢みたいだ」

テツヤの肩を借りたケイタは答えた。

テツヤ

「家に帰るか」

ケイタ 「帰ろう」

ケイタは答えた。暫く歩くと誰かが目の前に現れた。

テツヤ 「誰だあれ」

ケイタ 「知らん」

しかし目を凝らしてよく見る。そこにはアリサの姿があった。  
アリサ

「何してたの」



ケイタ

「森を冒険してた」

アリサ

「課題終わった？」

ケイタ

「いや。まだ。とりあえず帰ろうか」

彼等三人は家に帰る。

ケイタ

「しかし疲れたな」

テツヤ

「たしかに何年も森で遊んでた気がする」

蟲が鳴き始めた。危険なワニがこの森に住みついた。ケイタの些細な楽しみであった森の冒険は簡単な物ではなくなった。今回は一人で冒険に進めばケイタ命は無かったのかもしれない。テツヤとの絶妙なコンビネーションが効を奏した

だがケイタは明日も森の冒険に向かうであろうと思う。それは何故か。探求の追求か。未知との遭遇か。余興の延長か。

この世界の中に森がある。学校の麓にちょっとした広い深い森が存在する。

目の前に森があったから

とケイタは答えるであろつ。

アリサ

「ねえねえ森の冒険って面白いの？」

ケイタ

「まあね」

アリサ

「どれ位？」

ケイタ

「どれ位？うゝん。…不思議な…位かな」

ある場所にいる主はそつと溢した

テレパシーの主

「不思議な冒険か…」

僅かな笑みを溢した

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4173d/>

---

不思議な冒険

2010年10月27日07時02分発行